

---

# スクラップ

ソロモンの犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
スクラップ

【Nコード】  
N1760M

【作者名】  
ソロモンの犬

【あらすじ】  
男は能力者を集め目的を果たすためにいろいろな厄介ごとに巻き込まれてゆく

## 生身の人間（前書き）

初投稿です まあぐちゃぐちゃですね

## 生身の人間

空は灰色で目の前の風景も空と同じような色をしていた。

「これは、一雨降りそうだな」

成瀬潤一は空を見上げた後、顔を正面に戻し歩道を足早に歩いた。

ここからだ、家まで時間がかかる、恐らく家に帰宅している途中で雨が降り出し

上着がびつたりと肌に密着しズボンの右ポケットに入ってる携帯もおしゃかになる可能性が

ある。成瀬はどこか雨宿り出来そうな店を探すがそもそも店が見当たらない。

あるにはあるのだが 『生身の人間』 が入るのは少々抵抗がある。

考えてる間に成瀬の頬に冷たいものが触れた。

雨は数を一気に増しこの都市全体を覆い尽くした。

「仕方ないが多分少しの間だ、我慢しよう」

目の前にある店に歩を進め店の扉に手をかけた。

恐らく普通の重くもない扉なのだが、この扉に重しが付いてるかのように重い気がした

ゆっくりと開けるとベルの音が鳴り響いた。

「いらつしゃ・・・」

店員が言葉を口から出した後最後の言葉を喉の奥へと仕舞い込んでしまった。

店員はを鳩の目のように目を丸くし驚きのあまりに顔が硬直し口が空いている

5秒くらい経ってからようやく顔が表情を生み出し眉間に皺をよせ何か不思議な生物を

観察するかのような念入りにから下から上へと視線を走らせ

た。

「すまないが少しばかり雨宿りをさせてはもらえないだろうか」

店員は観察するのをやめ成瀬の顔を見て頭を上から下へと動かした

多分、構わないとゆう風に受け取って良いだろう。

成瀬は店の奥にあるカウンターの椅子に腰をおろした。

幸い店には客が俺一人らしく奇異な目で見られなく済んだのが救いだった。

この都市はサンシティーと呼ばれている。正式な名前は東京らしい

この都市に住む大半の住人が自分の体の一部や全身を機械で改造している

ごく一部の住人にはおれと同じく生身の人間もいるらしい。

しかも、その中に俺と同じく何かしらの超能力を持っている人間がいるという

情報を掴んだ。だからこの都市に来たのだ。このサンシティーのセキュリティーは半端じゃ

なく堅かった。ID登録やらエックス線やらそういう個人情報偽装するのはとても骨が折れた

だが侵入は成功した。成瀬はカウンターの左側にあるガラス窓の奥にある景色を眺めた

雨は灰色だった街の風景を黒い色に変えていた。

依頼（前書き）

## 依頼

成瀬は、店でただ座ってるだけだと悪いと思い

メニュー表を手に取り開いた。

メニュー表にはオイルドリンク、植物油のスープ、その他にもあったのだが

とてもじゃないけれど、食べたら死ぬかもしれない料理やドリンクばかりだった。

どうやら、この店はレストランらしいが名前がどこにも見当たらない。

名前の無いレストランなどあるのだろうか、店員に訊こうとしたが

やはりやめた。右ポケットから振動が体に伝わるのを感じ右手でポケット

から携帯を取り出し電話にでた。

「よお ブラックホール」

「何の用だ エリナ 用がないなら切るぞ」

仕事仲間のエリナから電話がかかってきた

「相変わらず無愛想ね もう少し愛想よくできないの 犬を見習

いなさい 犬を」

「愛想を振りまくなど馬鹿のやることだ。俺には出来ないね。で、用件はなんだ」

「依頼よ。明日17時30分にA-12エリアのHIA研究所にいるアイザックという男に荷物を届けて

欲しいそうよ」

「ふむ、俺たちに頼むということはこの法律に違反する届けなのか。用件

はもう無いのか」

「今の所ないわね。また用事ができたら連絡するわ。バイバイ」

携帯の奥の方からガチャという音が聞こえた。

成瀬は携帯を右ポケットにしまい視線を外の景色へとむける。

電話をしてる内に雨があがっていたらしく成瀬はカウンター席から立ち上がり

外に出た。店の奥から「またお越し下さいませ」と店員の声が聞こえてきた

「さてと、探し物をしなければな。」

成瀬はアスファルトと鉄とさきほど降っていた雨が入り混じって



いる路面

に歩を進める。  
いた。

サンシティーの太陽はジリジリと路面を焼いて

## コンタクト

成瀬は、能力者がいるという情報をネットで知った。

このサンシティーは極端に外との交流を遮断していた。

だが、ネットは別だ。この都市は極端に外に情報を

流すことを嫌がっているためか、それを利用して商売をする

奴もいる。俺はそいつとネット上でコンタクトを取り

能力者の住所 年齢 性別などの情報を買ってもらった

俺は今その能力者の家の前にいた。

家はドーム型の形状をしていて丸い窓が家に張り付く形で均等に並んでいた。成瀬は、扇型のドアの横にあるインターフォンを押した

ピンポンと軽快な音が心地よく耳に入ってきた。

数秒経ってからインターフォンの奥から声が聞こえてきた

「はい」

女の声が耳に入ってきた

「いきなり訪ねてすまない カメラから俺の姿は見えてると思うが俺はあんたを探していた。」

「私を、探していた」

女は困惑したような声をだした

「そう、いきなりですまない、あんたのことは少し調べさせてもらった。」

あんたが能力者だってことも」

女が息を飲む音が聞こえる気がした。

「私になんの用なの」

女の警戒する様な声が聞こえてくる

「あんたを捕まえにきたわけじゃない。俺はあんたを助けに来たんだ。」

「私を助けにきた。何故貴方が私を助ける必要があるの。」

「あんたが 俺と同じ能力者だからだ。それじゃ駄目か」

少しの間沈黙があった。成瀬は女の言葉を待った。

そんな簡単に信じてもらえるわけがないと分かっていた。

言葉だけじゃ理解は出来ても信じてもらえない。

「いいわ信じてあげる」

成瀬は思わず口から、「えっ」と小さく声をだしてしまった。

「貴方 私の能力は調べなかったの。」

「ああ、調べてないよ。ただ能力が使えるってことだけを知っていた」

「じゃあ、説明しとくはね。私の能力はサーチといって言葉であれ物であれ

それが声であれ調べることが出来るのよ」

「つまり俺が嘘をついてるか調べたってことか」

「そうよ 貴方の真意を調べさせてもらったわ」

成瀬は正直ほっとしていた。信じてもらうまで何日もコンタクト

を取るのではないのかと。

「信じてもらって助かる。すまんが中にいれてくれないか、

これから話が長くなる。それにこの暑い中俺も長話するのは

ごめんだ。

サンシティーの太陽がジリジリと成瀬の背中を焼いていた。

「ごめんなさい、今鍵を開けるわ」

扇形のドアがガチャと音をたてて自動的に横にスライドした。

ドアが開いた瞬間冷たい冷気が成瀬の体をまとった。

「どっぞ」

成瀬はエアコンの冷気を肌を感じながら家へと歩を進めた。

## ジャスミン茶

玄関で靴を脱ぎ廊下の奥の方に下へと続く階段があった。

そこからピアノの音が聞こえてきた。なんの曲だかわから

ないが、成瀬はとても落ち着く曲だと思った。階段を下に降り

ると白い部屋があった。その白い部屋の真ん中に木製の机があり

椅子があった。成瀬の方に背を向けて座っている女の姿があった。

女はこちらに振り向いた。その女は絶世の美女とは言えないが

整った顔立ちと言われればそういう顔をしていた。美人という

よりは、かわいらしいと表現したほうが良いだろう。

身長が低いせいか子供に見える。確か年齢は21のはず

身長が150くらいで童顔なので見た目の年齢は高校生にしか

見えない。制服をきたらもう高校生にしか見えない。

実際、女が着ている服は無地のTシャツにジーンズと

動きやすそうな格好をしていた。

「どうぞ そこにある椅子に座って」

成瀬は椅子へと腰掛ける。

「あなたは・・・機械の体じゃないわよね。」

「ああ、正真正銘、人肉100%さ」

女は食器棚から蝶のマークが入ったTカップを2個取り

だし、机の上に置いた後冷蔵庫から薄茶色の水をTカップに注いだ。

「ありがとう。ずっと喉が乾いていたんだ。いただくよ。」

成瀬はTカップを手に取り一気に喉の奥へと流し込む。

紅茶とは違う味がした。似ているのだが、

紅茶よりかは薄くしかし味に深みがあった。

「これは、なんだい。」

「ジャスミン茶よ。飲んだことないの。」

「ああ、初めて飲んだよ。」

女は視線をこちら向けて来た。

「さて、大事な話があるんですよ。」

成瀬は腕を組、女に視線をあわせた。

「ああ、その前に君の名前を覚えてくれないか。ずっと

あんたとかお前とかいってると少し話しづらいんでな。」

「私の名前は水野彩よ。呼び方は何でも良いわよ。」

「わかった。水野お前は今恐らくある組織からおわれているよな。」

水野が、頷く。「俺はその組織と敵対する組織なんだ。俺のいる

組織は簡単に言えば能力者保護施設みたいなもんだ。」

「つまり 私を保護しにきたってこと。」

「いや、保護しにきたわけじゃないんだ。頼みにきたんだよ。」

水野は探るような目つきで成瀬の目を見てくる。

「俺たちの組織に無理に入れて言ってるんじゃないんだ。水野

にとってもメリットがある話じゃ無いと思うが、基本的には今までの生活と何にも

変わらないし 組織には仕事がある。別にやりたくないんなら今の



仕事を続ければいい。」

成瀬はTカップにジャスミン茶を注いだ。

「その組織は入って何の意味があるの。」

「危険を知らせ合っただよ。」

「つまり情報を交換しあって逃げるってこと。」

「まあ、そういうことだな。どうだ悪い話じゃないだろう。」

「確かに 悪い話では無いわ。 貴方の言ってることは全部

真実だし助け合うことにより逃げれる可能性があがる。

だけど、貴方はまだ何か隠してるわね。」

成瀬は顔に笑みを浮かべる。

「ああ、そうさ、だけどこれ以上は話せねえ。入ってからの

お楽しみって奴さ。」

水野は眉間に皺をよせ顎を手の甲で擦りながら何かを考えていた。

成瀬は、腕時計を見てから水野に視線を戻した。

「そろそろ時間なんで失礼させてもらっよ。また二日後にくるよ。」

「

その時に答えを訊かせてもらうよ。」

成瀬は椅子から腰をあげ、階段へと歩く、階段の前で止まり、水野の方に顔を向ける

「ジャスミン茶おいしかったよ　またごちそうしてくれ。」

それだけ言うと再び動きだし階段を昇り廊下を歩き扇型のドアが自動

的に開く、その瞬間に熱風が成瀬を包み込む。

ドアから成瀬がでると同時に携帯が鳴った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1760m/>

---

スクラップ

2010年10月9日22時33分発行